

の濱に石垣を多くつけり、其故につく石といへる心なるを、略してつくしと云成べし、雜書の説に、上古の時、西蕃の國より度々日本を侵したる事あり、其後仲哀帝も、異國より來り侵せし賊の流矢にあたりて崩じ給ふといへり、菅丞相のうたに、筥崎や千世の松原石だ、み崩れん世まで君はましませ、是いにしへ筑前の海邊、筥崎博多のあたりに、石垣ありし證なり、昔より博多は唐土船の著し所にて、要害堅固にして、石垣多かりしにや、博多の別名を石城府といふ事、僧萬里の梅庵集、及異國の人作りし海東諸國記にも見えたる、近代龜山後宇多の御時、蒙古の賊兵多く攻來りしに、博多の濱に石垣をつきし事は、上代より有し石垣を修補したるなり、此時始てつきたるにはあらず、鎌倉の北條家より、筑前の太宰少貳に書を遣して、昔よりありし石垣を修復すべきよしを、催せしを少貳より又此邊の士に下知せし證文あり、其石垣は今も博多の西、古道松原生のまつ原、今津邊、所々に少残れり、然れば昔この國をつくしと名付し事は、筑石といふことばをとれる成べし、是前人のいまだいはざる所篤信が臆見なれど、玄ばらく記して識者の是正を待のみ、

〔古事記傳五〕筑紫國、萬葉五三丁に都久紫能君仁とあり、後に二國に分れたり、和名抄に、筑前筑紫乃三久知乃筑後筑紫乃三之里とある是なり、風土記に、筑後國者、本與筑前國合爲一國と云り、○中さて如是二に分れしは、何御代とも知れず、書紀景行卷十八年下に、筑紫後國とあれば、其より前かはた分しは後なれど、前へも及してかくは書るか、都久志と云名義は、筑後風土記に三説ある中の一に、昔この前と後との堺なる山に、荒ぶる神ありて、往來人多に取殺されき、故其神を人命盡神ヒトミツシノカミとなむ云ける、後に祝祭て筑紫神と申すとあり、此説さもありぬべく聞ゆ、今二の説も共に盡の意な書紀私記に、國形の木兔に似たる故とあるを、世の物知入も用だれど、此もひがごと書きこゆ、又世の物知入も用だれど、此もひがごと書きこゆ、式に筑前國御笠郡筑紫神社あり、此神なるべし、又近世に、貝原某が釋名てふ物に、古異國より冠來を防むがために、筑前の北方の海濱に石垣を多く築せ、賜ひし故に、築石の意ならむと云る、是も由ありて思ゆれど、異國の賊を防がれし石垣を